**板垣　直子 （いたがき・なおこ）**

**１、プロフィール**

詩文学研究家、評論家。美学、哲学の素養と欧州文芸学を基礎として、時勢に動かされないで評論活動を展開した。

＜生没＞

1896（明治29）年11月18日 ～ 1977（昭和52）年１月21日

＜代表作＞

評論『評伝樋口一葉』『明治・大正・昭和の女流文学』

『夏目漱石－伝記と文学－』

＜青森との関わり＞

北津軽郡栄村(現五所川原市）生まれ。

**２、作家解説**

はじめ平山姓。西洋美術史家、板垣鷹穂と結婚、板垣姓となる。明治43年北津軽郡栄小学校を卒業、弘前高等女学校に入学。大正３年卒業。日本女子大学英文科に入学、大正７年卒業後も研究科にあり、東京帝国大学第一回聴講生となる。

大正12年ゲオルヒ・グロナウ『レオナルド・ダ・ヴィンチ』を翻訳出版。

現代文学を評論したものに『現代小説論』（昭和13年）『事変下の文学』（16年）などがあり、女流文学に関しては、『評伝樋口一葉』（17年）､『林芙美子』（31年）､『平林たい子』（31年）、『明治・大正・昭和の女流文学』（42年）などと関心の深さを示す。もう一つの分野は『漱石文学の背景』（31年）『夏目漱石－伝記と文学』などの漱石研究である。

一方、『欧州文芸思潮史』（25年）のような欧州文芸学の学殖を示す著書があり、比較文学研究では島田謹二、吉田精一らと並ぶ存在であることが裏づけられている。

**３、資料紹介**

〇「犀星と春夫」

原稿

260mm×350mm（15枚）

佐藤春夫が「文芸時評」において､室生犀星の作品を酷評したことに対する筆者の見解を述べており､「この事件は氏の文筆生涯に印した一点のしみにも似て､氏のために惜しんでも余りある」と佐藤春夫の非を指摘している。